校長研修だより１３８

モチベーションの正しい使い方（GIANT KILLING）

２０２４・２・７　重枝 一郎

入試業務もあと２月入試と後期入試になりました。あと少しよろしくお願いします。
校長研修だより４４号「チームになろう」で，次のように書いた。

世の中で「成功している」と評価されるチームは，例外なく活気がある。メンバーが委縮したり，逆にだらけていたりするチームは，前向きな考えや意見が出るはずもない。
43 号にも書いたが，人が集まっただけではチームではない。集まった人たちがチームとしてまとまっていくプロセスが重要である。
私はチームスポーツで例えることが多いが，最初はバラバラでも，ともにトレーニングをしたり，試合に負けたりすることで，チームになっていくことがある。
また，ある学年の先生から，生徒指導上の問題がとても多いが，その分学年職員のまとまり向上しているという話を聞いた。私も教育困難校の経験が多いので同様の経験をしている。一人ではできないことがたくさん生まれ，協働しなくてはならない必然が自然と生まれるからである。私の経験から一つ言えるのは，暗いトンネルが永遠に続く学校は世の中に一つもないということである。**また，トンネルを抜ける時には多くの仲間を得る。まさに，ピンチはチャンスである。**

活気に満ちているチームをつくる大前提は，**「モチベーション」**である。ワークエンゲイジメント（114 号）でも書いたが，「働きがい」のことになる。これがチームの推進力を生む。
この**「モチベーション」**を高めるには，「自分はチームのために何ができるか」と常に考える癖をつけることが第一歩になる。そして，「自分は推進力の一助になっているか，それともただぶら下がっているだけか」を考える必要がある。
「GIANT KILLING」というサッカー漫画がある。「GIANT KILLING」とは，「大物喰いの大番狂わせ」のことで，この漫画は，監督を主人公にした新しいフットボール漫画と言われる。話の内容としては，負け癖のついてしまった選手・スタッフ・サポーターたち・・・そんなチームに就任した監督が，意表を突く戦略とカリスマ性で強いチーム・応援したいチームへと変貌させていく。下の話は，優勝を占う大切な一戦の前の試合前ミーティングで，監督が選手に語っているシーンである。

・・・俺たちはとうとうここまで，自力でリーグタイトルが狙えるところまできた。なんでこれが可能だったかわかるか？　お前らも俺も過去の経歴を見ても，優勝とかてっぺん獲った経験のない奴らばかりだ。そんな奴らが弱小と言われる立場から脱したい，自分の人生を変えたいって本気で思ったんだ。それで結果がついてきた。全員が本気になればこれまで不可能だったことも可能になるって知ったんだ。ベテランも若手も関係なく，全員が強くなりたいと思い，選手もスタッフも一丸となって，みんなで見たこともない景色を見てみたいと思っている。このモチベーションこそが俺たちの最大の武器だ。俺たちはコイツで（相手チーム）の伝統に立ち向かう。まるで精神論みたいに聞こえるけどさ，そうじゃないことはもうお前らならわかっているはずだ。**強くなりたいと本気で思う奴は，それこそピッチ上では冷静になるし，プレーのディテールを大事にする。本気でてっぺん狙いたいって思ったら，リスクが何かわかった上で，それでもチャレンジの姿勢を忘れない。お前らは今シーズン，モチベーションの正しい使い方を身に付けたんだよ。**すべての原動力となるモチベーション。頂上を見たことのない俺たちは，そのバカでかさなら負けない。さあやってやろうぜ，リーグ戦最後のアウェイゲームだ。ベンチに入らないメンバーも全員で乗り込むぞ。そこで俺らのもっているもん全部ぶちかまして，最強チームとしてここに戻ってこようぜ。（おおおおーっ！！！）

太字のところが共感ポイント！共通テスト前日の話でも受験生に話した。